文接続助詞「に」に関する考察*

3R－6

武藤 伸明　　中川 裕志

横浜国立大学　工学部

1　はじめに

助詞「に」は「と」と同様に，1つの助詞が格助詞，並立助詞など幾つかの構文的位置に現れるという特徴を持つ．このような助詞について，それぞれの用法に共通する意味があるならばそれを抽出しようというのがわれわれの狙いである．本稿は「に」の用法の1つである文接続の用法に注目し，並立助詞の「に」との，統語的，意味的共通点について論じる．

2　文接続の「に」

「以外に，以上に，ことに，だけに，ために」など，形式名詞に助詞「に」が付いた表現がある．(1) に見られるように，これらの表現は文および名詞句に付着することができる．

(1) a. 太郎が来た以外に花子が来た．

b. 太郎以外に花子が来た.[1]

(形式) 名詞に付着しうる「に」の範疇として並立助詞と格助詞が考えられるが，(1) のような「に」はそのどちらでもない．このことを見るために，まず並立助詞と比較をする．次の文の「に」は並立助詞であり，「太郎」と「花子」という2つの名詞句を接続して「太郎と花子」という名詞句を形成する．

(2) 太郎に花子が来た．

これに対して (1b) の「に」も名詞句「太郎以外」と「花子」を接続しているように見える．しかし (2) は2番めの名詞句「花子」を省略して発話することができないのに対して，(1b) ではそれが可能である．すなわち (1b) は「太郎以外」と「花子」が1つの名詞句を形成しているのではない．

意味的にも (1b) の「に」は並立助詞とは異なる．並立助詞の意味は接続された2名詞句の意味対象からなる集合を生成する操作であるといえる．例えば (2) の読みは $come(\{t,h\})$ である．ここで，もし (1b) の「に」が並立助詞ならば，その読みは $come(\{x|x \neq t\} \cup \{h\})$ となるはずであるが，文の実際の読みは「太郎が来た，かつ花子が来た」である．

「太郎以外に」が「花子」に係っていないとすれば，その係る先は文の述語であり，この「に」の範疇は格助詞になるわけであるが，意味的に (1b) の「に」は格助詞とも異なる．一般的に格助詞の意味は名詞句の意味対象を述語のある意味役割に代入する操作と規定できるが，(1b) の場合には「太郎以外」を代入するべき適切な述語の意味役割が存在しない．

また，形式名詞＋「に」という表現は (1a) のように文にも付着するが，形式名詞＋「に」が付着する文は主語，時制を含み，主題，終助詞を含まない．すなわち南 [2] の表現分類におけるB類の文である．南は言語表現を，陳述 — 事態の描写から情報の伝達に関わるものまでA～Dの4段階に分類している．それぞれの段階の表現は同じ段階の表現と共起するが，格助詞がA群に属するのに対して形式名詞＋「に」はB群の文に関わり，別の段階の表現である．

結局，形式名詞＋「に」を含む文の読みを説明するには，形式名詞＋「に」は2つの命題 (事態) の関係を意味するという仮定が必要である．例えば (1b) の場合には，その深層構造は (1a) であり，「以外に」は「太郎が来た」と「花子が来た」の間の関係を表していると考える．このような意味の「に」の用法を，文接続の「に」と呼ぶことにする．

3　並立助詞との対比

並立助詞の「に」と文接続の「に」には統語的近接性が感じられる．例えば (1b) の「に」は統語的には並立助詞として解釈されてもよいはずである．この節では並立

[0] Japanese Sentential Conjunct *'Ni'*

Nobuaki MUTOH, Hiroshi NAKAGAWA
Faculty of Engineering, Yokohama National University
156 Tokiwadai, Hodogaya-ku, Yokohama 240, Japan

[1] 例文 (1) は [1] による．

助詞と文接続の「に」の間の他の共通点について，並立助詞の「と」とも比較しながら論じる．

文接続の「に」は2文間の対等関係ではなく従属関係を表す． 例えば(1a)では「太郎が来た」と「花子が来た」という2つの命題は対等ではない． 「太郎が来た」がまず背景情報として提示され，「花子が来た」がそれに付随する出来事として述べられている． このとき，「に」によって従属関係という意味が生じ，形式名詞はその従属関係の内容について情報を加える働きをしていると考えられる． 従属関係という意味は並立助詞の「に」にも共通して見られる． 寺村[3]は，並立助詞の「と」と「に」について，集合の要素を列挙するという点では同じであるが，「と」の場合には列挙された要素の間にはある種の等質性が感じられる(ex. 太郎と次郎と花子)のに対して，「に」の場合には要素の間には非対等，主従の関係が感じられる(ex. 梅にうぐいす，ビールにおつまみ)としている．

並立助詞の「と」と「に」は，そのスコープについても異なる． 例えば「男の子と女の子のおもちゃ」「男の子に女の子のおもちゃ」のような名詞句は，「女の子のおもちゃ＋男の子のおもちゃ」と「女の子＋男の子のおもちゃ」という2通りに曖昧であるが，並立助詞が「と」であるか「に」であるかによって，その読みに微妙な偏好が生じ，並立助詞が「と」の場合には前者の読みがされやすく，「に」の場合には後者の読みがされやすい．つまり「と」は狭いスコープを，「に」は逆に広いスコープを取りやすい． (3)は並立助詞と取り立て助詞「も」が共起する文であるが，このような文についても「と」と「に」のスコープの違いを見ることができる．

(3) 太郎と / に花子も来た．

「と」の場合には「花子」だけが「も」のスコープに入り「太郎」がスコープの外にあるという読みができないのに対して，「に」の場合にはそれが可能である．

(1b)は次の2通りの統語構造を持つが，実際の読みとなるのは文接続の「に」による構造だけである．

(4) a. *[太郎以外に花子]$_{NP}$ が来た．

b. [太郎(が来た)]$_{S1}$ 以外に [花子が来た]$_{S2}$.

このことは，並立助詞の「に」の広いスコープを取る傾向が文接続の助詞にも延長されると考えれば説明できる．すなわち「に」のスコープが狭い構造(4a)よりも広い構造(4b)が優先する．

「と」と「に」の対等 / 非対等という意味の違いと，スコープの傾向の違いは無関係ではなく，前者の性質から後者が派生しているのであろう． 例えば「男の子と / に女の子のおもちゃ」の例を考えれば，「と」の場合にはその対等の意味から，「と」によって接続される2名詞句が「男の子」「女の子」という意味的に同じ種類に属する主体を表すものであり，それらが揃って「おもちゃ」に係るという構造が支配的である． 結果的にこれは狭いスコープが支配的であることになる．「に」の場合には逆に「男の子」「女の子のおもちゃ」という異なった種類に属する主体を表す名詞句 — 非対等のものを結合する構造が支配的である．結果的に広いスコープが支配的になる．

「と」にも文接続の助詞としての機能があり，これは次の文のように2事象の因果関係を表す．

(5) 風邪が吹くと桶屋が儲かる．

つまり，対等の意味を持つ並立助詞の「と」に対してこの「と」は従属関係を意味するが，この2つの「と」は統語的な現れ方が全く別である． これは，同じ従属の意味を持つ並立助詞の「に」と文接続の「に」が統語的に近接していることを考えると興味深い．

4 おわりに

本稿は文接続の「に」の言語的特徴について論じた．また，並立助詞の「に」との比較を行ない，非対等の意味とスコープの傾向という共通点について指摘した． これをはっきりさせるために「と，に」の他の用法に関する比較検討が必要である．また紙数の関係で触れなかったが，文接続の「に」の意味を形式的に扱う際にも幾つかの問題があり，これについても今後の課題としたい．

参考文献

[1] Ikumi Imani, Takao Gunji, and Koichi Hashida. Personal communication, 1993.

[2] 南不二男. 現代日本語の構造. 大修館書店, 1974.

[3] 寺村秀夫. 日本語のシンタクスと意味 III. くろしお出版, 1991.